名曲、現代詩に通じる味わい

作詞家、松本隆(72)の作詞活動50周年記念コンサート「風街オデッセイ2021」が11月5・6日、東京の日本武道館で開かれた。従来の歌謡曲やフォークにはなかった言葉を操り、次々と名曲を生んだ詩人の魅力が浮き彫りになった。

松本隆 作詞活動50周年公演

ドラム経験、言葉のビート生む

太田裕美が「木綿のハンカチーフ」、アグネス・チャンが「ポケットいっぱいの秘密」、安田成美が「風の谷のナウシカ」を歌い、亡くなった桑名正博に代わってB'zが「セクシャルバイオレットNo.1」を演奏する。

往年の松本作品が次々と披露され、初日の公演も大詰めを迎えた頃、ステージ中央にドラムセットが運び込まれた。いよいよ主役のお出ましだ。

大きな拍手を浴びながら、鈴木茂(ギター)と細野晴臣(ベース)が現れ、満を持して登場した松本がドラムの前に悠々と陣取る。2013年に逝った大滝詠一を除く3人による伝説のロックバンド「はっぴいえんど」の演奏が始まった。

披露した曲は、細野がボーカルを務めた「風をあつめて」など3曲。45周年公演(ブルーレイ「風街レジェンド2015」が12月に発売)では、大滝の代わりに佐野元春が加わる一幕もあったが、今回は曽我部恵一が「12月の雨の日」を歌った。

◆

はっぴいえんどは1970年にデビューした日本語ロックのパイオニアで、作詞を主に担ったのがドラムの松本だった。バンドは3年で解散。作詞家に転じた松本は50曲余りをヒットチャートの1位に送り出す売れっ子になるのだが、原点はやはりバンド時代にある。

4年前のインタビューで松本はこう話してくれた。「ロック好きのドラマーとランボーやボードレールの詩を愛読する文学少年。2つの自分がずっと平行線をたどっていました」。その「2つの自分」がはっぴいえんどで交差したのだ。

この夜、松本のドラムは細野のベースと有機的に絡み合い、独特のうねりを生んだ。実に心地のよいグループだった。

松本は「ビートが自分の体に入っていて、そのグループ感が自然と言葉に表れてくる」とインタビューで語った。ドラムで培ったリズム感が作詞家としての大きなアドバンテージになったのだ。

「松本隆 言葉の教室」(延江浩著)でも次のように述べている。「歌の快感は、音にしたとき気持ちいいかどうかで決まります。(中略)大切なのはリズム。気持ちのいい語感かどうか。日本語として気持ちいい語感というのは、リズムやイントネーションによってつくられる」

評伝「風街とデラシネ作詞家・松本隆の50年」の著者で、同じタイトルの2枚組CD(松本隆作品集)の選曲と解説も手がけた音楽評論家の田家秀樹は「松本は現代詩としても評価されるべき言葉のクオリティーを持ち、作詞と作詩を両立させた」と指摘する。

◆

松本は影響を受けた詩人として「宮沢賢治と中原中也」を挙げているが、現代詩人の渡辺武信にも傾倒していた。「続・渡辺武信詩集」(現代詩文庫)に松本による渡辺論「風の詩人」が収録されている。70年に出た渡辺の詩集を手に入れて「ドラムのスティックと歌詞を書きかけた大学ノートと、その詩集を持って、街に出かけるのが日常になった」という。

「凍てついた空を街駱が縁どる 雨あがりの街に 風がふいに立る」(「12月の雨の日」)

「伽藍とした 防波堤ごしに 緋色の帆を掲げた都市が 碇泊してるのが 見えたんです」(「風をあつめて」)

松本作品は文字にすると、まるで現代詩のようで、歌謡曲やフォークには使われなかった言葉や表現がたくさん並んでいるが、音楽に乗せて歌われると、すっと耳になじんで自然に覚えてしまう。万葉集以来の和歌の伝統を受け継いでいるともいえるだろう。

作詞家に転じてからの仕事は松田聖子のヒット曲など多岐にわたるが、通底するモチーフの一つに「風街」がある。松本いわく「失われた街への郷愁」。例えば、路面電車が縦横に走っていた頃の東京のイメージだ。

郷愁は今の都会の生きにくさ、孤独感の裏返しでもある。「くもり硝子の向うは風の街 問わず語りの心が切ないね」と歌う「ルビーの指環」はその代表例だ。この夜は横山剣がねっとりとした歌声でカバーした。

記念ライブを通して松本作品の最高峰ではないかと感じたのが「ああ時の河を渡る船に オールはない 流されてく」と歌う「Woman"Wの悲劇"より」だ。今のJポップではなかなか味わえないスケールの大きさがある。若き実力派の鈴木瑛美子がカバーし、大きな拍手を浴びていた。

「君は天然色」に挑んだ新人の川崎鷹也も見事なカバーぶりだった。松本作品は現代詩としても読み応えがあるが、歌詞は歌われてこそ真価を発揮する。今後も長く歌い継がれ、スタンダードになると確信させるステージだった。

(編集委員 吉田俊宏)

作詞家として多くのヒット作を生み出したが、原点はバンド時代にある=CYANDO撮影

演奏する(左から)細野晴臣、松本隆、鈴木茂=CYANDO撮影

掲載日 2021年11月27日 日本経済新聞 朝刊 40ページ ©日本経済新聞社 無断複製転載を禁じます。